文　法（史的研究―古代）

山口佳紀

はじめに

昭和55・56年の両年度に発表された古代語文法に関わる論考のうち、主要なものを紹介し、気づいた点を注記することにする。取り上げる限りにおいては、なるべく具体的に問題点を指摘したいと思うが、紙数に限度があるから、いずれ十分なものとはなり得ないであろう。

なお、「古代」の範囲は、「近代」との分担を考えて、鎌倉時代までとしたい。論文によっては、その後の時代までを含んで論じたもののあることは、言うまでもない。

一　単行本

まず、この期間に公刊された単行本の類を瞥見する。

①小路一光『万葉集助動詞の研究』（明治書院、昭55・2）

②小松光三『国語助動詞意味論』（笠間書院、昭55・11）

③山口堯二『古代接続法の研究』（明治書院、昭55・12）

④吉永登『万葉―その探究』（現代創造社、昭56・4）

⑤大坪併治『平安時代における訓点語の文法』（風間書房、昭56・8）

⑥武田孝『古典語・古典教育論考』（教育出版センター、昭56・9）

⑦北原保雄『日本語助動詞の研究』（大修館書店、昭56・11）

小路①は、万葉集の助動詞について、本質・分類・意味・用法などを論じたものである。

小松②は、中古の助動詞を中心としたものであるが、従来の助動詞の意味的研究が語論のレベルにあったのに対して、構文論的に捉え直すべき必要を述べ、存在論的あるいは認識論的思考を背景とする、独特の意味論・表現論を展開している。本書の方法は甚だ演繹的であって、それが日本語の現実をよく説明したものかどうか、今後十分に検討されなくてはならない。

山口③は、著者がこれまで積み上げて来た古代接続法研究の一応の決算と言うべきものである。いかなる接続形式がいかなる意味関係に適用されているかを検討して行くことによって、各接続形式の表現性が明らかにされ、古代における接続法の体系が描き出される。その詳密・鋭利な分析は、極めて説得力に富んでいる。これについては、すでに近藤泰弘による書評（『国語と国文学』59―1、昭57・1）が出ている。

吉永④は、著者の既発表論文を集めた第四論文集である。文学・

語学の両面にわたる内容であるが、万葉集の味読に支えられた語彙・語法に関する著者の意見は、傾聴に値するものが多い。

大坪⑤は、平安時代の訓点資料に現れた言語の文法を体系的に記述したものである。平安時代内部における時代的変遷にも留意し、また奈良時代との関係や和文との差についても眼が配られている。多くの資料から豊富な用例が集められており、用例集としての価値も高い。

武田⑥は、古典語ならびに古典教育に関わる著者の論文を集成したものである。中に、中世の「侍り」や「ごさんなれ」などを扱った論文が含まれ、ここでも著者の穏健・着実な学風が発揮されている。

北原⑦は、本編の部分が、Ⅰ助動詞に関する構文論的考察と、Ⅱ助動語の分類とに分れる。Ⅰは、著者がこれまで諸所に発表して注目を浴びて来た独自の構文論を、助動詞を中心としてまとめ直したもの、Ⅱは助動詞の分類について、接続の仕方・活用・構文的職能・表現性・意味の各観点から考察を施したものである。この書は、古代語のみに関わるわけではないが、著者の構文論は日本語構文論の先端を行くものとして既に高い評価を受けており、必読の文献と言ってよい。ただし、Ⅰは現代語を中心としていてそれなりに読み易いが、Ⅱは古代語（中古語）と現代語とが交互に扱われていて、やや雑然とした印象を受ける。古代語と現代語とを部立てを分けて論じた方が、論の整理に役立ったのではあるまいか。

なお、講座物として、『講座日本語学』（明治書院）の刊行が始まり、古代文法に関わるものとしては、次の巻が出た。

『③現代文法との史的対照』（昭56・11）

『⑨敬語史』（昭56・12）

ともに、各時代の文法と現代文法との対照がはかられており、意欲的な試行として注目される。ただし、従来古代語と現代語とでは研究の視点が異なる場合が多く、十分な対照を可能にするような研究史的蓄積に乏しいということもあって、この試みは必ずしも成功しているとは言いがたい。また、『③現代文法との史的対照』の巻で、「上代語」以下他の時代の言語については、現代語との対照がそれなりに施されているのに、「中古語」（森野宗明執筆）だけが、「文法を中心にして中古語について述べるというのが小稿に課せられた仕事である」として、特に現代語との対照という作業が行われていないのは、編集方針の不徹底を示すものではなかろうか。

以上で単行本の類の紹介を終える。以下、雑誌論文等については、「用言」「助詞・助動詞」「句論・文論」「敬語」の各項目に分けて記述を進めるが、この分類に収まり切れぬものが多く、飽くまでも便宜的な措置であることを、お断りしておく。

二　用言

用言研究として新しい傾向を示すものが、幾つか出た。

①斎藤博「日本語動詞のテンスとアスペクト(2)」（『東京成徳短期大学紀要』15、昭56・3）

②田村宏「上代日本語動詞活用の生成音韻論的解釈」（『金沢大学国語国文』7、昭55・3）

③中山昌久「動詞活用の種類とその記述方法」（『国語と国文学』58―3、昭56・3）

斎藤①は、現代語を扱った前稿「日本語動詞のテンスとアスペクト(1)」（『東京成徳短期大学紀要』11、昭53・4）に続いて、古代語

のテンス・アスペクトを考察したものである。ここでは、動詞について、〈動作性〉〈持続性〉〈主体変化性〉の有無を考え、それにヌ・ツ・タリが接した時に、いかなるアスペクトを表わすことになるかが検討されている。この論文は未完であり、今後、テンス表示要素としてのキ・ケリなどが取り上げられるはずである。続稿を期待したい。なお、いわゆる完了のタリの連体形に関して、動詞の動作が静態化されて、タルが連詞化し、「堂々タル」「峨々タル」などのタルを生じたとするのは、明らかに誤解であろう。

田村②は、表題のとおりの内容であるが、新しい方法の適用という点に意義が感じられるものの、そのことによって明らかになった事柄は意外に乏しいように思われた。なお、国語史的事項に対する誤解が二三目についた。

中山③は、日本語動詞の音形態について、上代から現代まで、あるいは各種の方言にわたって、一つの記述方法によって記述しようとする試みである。ただ、この荘大な論を十分に展開するには、紙面が狭隘に過ぎたようである。

さて、動詞ソムク（背）について、似たような問題を扱ったものが二つ出た。

④山田みどり「『～をそむく』と『～にそむく』」（『成蹊国文』14、昭55・12）

⑤信太知子「『～をそむく』から『～にそむく』へ――動作の対象を示す格表示の交替――」（『国語語彙史の研究』二、和泉書院、昭56・5）

いずれも、ソムク（背）が格助詞としてヲをとったりニをとったりする現象について検討したものであるが、期せずして同じ問題が注目されたのは、動詞と格の問題が今後の重要な一つのテーマになるであろうことを暗示するものかも知れない。山田④は、動詞の意味内容の差異あるいは変化を重視して、格助詞自体の変化ではないとする。それに対して、信太⑤は、動詞の語義変化を認める一方、格助詞ヲの変質を考慮している点に違いが見られる。他の動詞にも、似たような問題を持つものがあり、併せて考えてみたい所である。

なお、『万葉』誌上で行われた、

風をだに恋ふるはともし風をだに来むとし待たば何か嘆かむ（『万葉四・四八九）

の歌の解釈をめぐる論争も、右の問題と共通する所がある。

⑥川村幸次郎「『風をだに』考――長谷川信好氏論文に寄せて――」（『万葉』104、昭55・7）

⑦大藤重彦「風をだに恋ふるはともし続貂――準体言の視点――」（『万葉』105、昭55・12）

⑧藤原芳雄「風をだに恋ふるはともし」（『万葉』108、昭56・9）

かつて、長谷川信好「『風をだに恋ふるはともし』私攷」（『万葉』88、昭50・6）は、従来「風ヲ―恋フ」の関係として捉えられていたのに対して、「風ヲ―トモシ」という関係として理解すべきであるという新説を提出した。これに対して、右の川村⑥・藤原⑧は、旧説と同じく、「風ヲ―恋フ」の関係として捉えようとするもので、いずれも「～ニ恋フ」と「～ヲ恋フ」との差に触れている。なお、大藤⑦は、長谷川説に立つ時、「恋フル」という準体言の用法に問題があるとして構文的解析を行なった、極めて興味深い論である。

その他、内田賢徳「動詞重複形態の述語」（『帝塚山学院大学日本

文学研究』11、昭55・2）、信太知子「上代語における連体形準体法について――万葉集を中心にク語法との関連など――」（『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』大修館書店、昭56・7）、山口佳紀「形容動詞の成立」（『国語と国文学』58―5、昭56・5）、同「タリ型形容動詞の成立」（『国語国文』50―2、昭56・12）などがあった。

三　助詞・助動詞

助詞については、

①近藤泰弘「助詞『を』の分類―上代―」（『国語と国文学』57―10、昭55・10）

が、まず注目される。助詞の分類がこれまで意味解釈によって行われて来たのに対して、なるべく構文的規則に頼って分類を遂行しようという、意欲的な試みである。古代語の構文論的分析は、従来甚だ手薄であり、この論における問題の設定の仕方と明解な論の運びが、極めて新鮮に感じられた。ただし、間投助詞「を」を広義の連用（成分）に続くものとするが、その「広義の連用」という概念が今一つ明瞭を欠くために、そこから目的語となっている体言が除かれる理由が判然としない。それが、

皆人を（乎）寝よとの鐘は打つなれど（万葉四・六〇七）

のような「を」が格助詞か間投助詞かという問題（近藤は格助詞とするが）にも関わって来る。さらに論の整備を望みたい。

ノ・ガの区別については、

②山田瑩徹「三代集の詞書を通して見た格助詞『が』と『の』」（『日本大学人文科学研究所紀要』23、昭55・3）

③阿部八郎「『今昔物語集』本朝世俗部の主格助詞」（『国語研究』43、昭55・3）

④近藤泰弘「高山寺蔵史記殷本紀・周本紀の訓点における『の』『が』の用法」（『高山寺古訓点資料第一』、東大出版会、昭55・2）

⑤有近列子「古今和歌集古注より見た主格意識――『の』と『が』について――」（『国文白百合』12、昭56・3）

が出て、それぞれにこの事象に対する問題意識の進展が見られた。

⑥山内洋一郎「接続助詞『ものから』『ものの』について」（『奈良教育大学国文』5、昭56・9）

は、モノカラとモノノの差を扱ったもの。両者は、一つのものの持つ表裏二面をつないでいるが、前者は重い内容を有するのに対して、後者は軽く、挿入句性のあることを述べる。短文ながら、筆者の繊細な読解力を感じさせる好論である。

⑦高村まどか「源氏物語における『て』の一用法――仮定条件法をめぐって――」（『野州国文学〈国学院大栃木短大〉』28、昭56・12）

は、～テが仮定条件を表わす場合に注目したもので、～バとの違いを次のように整理している。

バ　会話主・明・主観的・情意的・描写的
テ　心内主・暗・客観的・論理的・解説的

文法論的というより表現論的色彩が強いが、面白い問題である。助詞に関しては、他にも論が少なくないが、紙数の関係で省略する。

助動詞については、関係論文が比較的乏しかった。前述のように、助動詞研究の専書が三種も公刊されたのに対して、意外にも感じられる。

⑧井上親雄「終止形接続の助動詞『らむ』――源氏物語の事例――」

（『広島女学院大学国語国文学誌』10、昭55・12）

終止形接続の助動詞六語が、ベシーマジ、ナリーメリ、ラシーラムと二語ずつ対をなしているという認識から、ラムをラシとの対比において考察したもの。そこから、ラムは「確信のない、または疑念のある推量」であること、また〝時〟に関係しないことが導き出されている。確かに、そのような視点からの考究は、従来欠けていたと思われる。ただ、ラムを、ケムーラムームという系列として見ることとどう関わるかが問題であろう。

⑨田村忠士「中古仮名文学に現われた完了の助動詞『つ・ぬ』の命令表現――源氏物語の用例を中心に――」（『平安文学研究』64、昭55・12）

テヨ・ネを用いる命令表現が、動詞命令形によるものとどう違うかを考えようとした論。しかし、テヨとネとの違いの方に重点がかかり、動詞命令形によるものとの対比は、手薄になった観がある。

以上の他にも、助動詞を扱った論文が若干あるが、省略する。

四　句論・文論

①工藤力男「形状言による副詞句の形成」（『万葉』103、昭55・3）

「袖もしほほに」のような〈xモyニ〉の形式を中心に、シホホのような重複形、ウラウラのような反復形、サヤカのような肥大形などの関係を論ずる。一つの語基について、重複形と反復形との双方を有するものはないなど、重要な指摘が幾つもなされている。なお、両者が相補分布的であるということと、前者の方が後者より独立性が弱いという指摘とが、どう関わるか、多少疑問が残った。

②近藤泰弘「中古語の準体構造について」（『国語と国文学』58―5、昭56・5）

いわゆる準体句について、これを連体修飾の主名詞が存在しない形と見ることによって、連体修飾の構造との関係を考えながら、統一的に記述しようとしたものである。個々の解釈には問題も残るが、現代語構文論の成果が十分に摂取されており、古代語文法研究の一つの方向を指し示したものと言えよう。ただし、種々の構文的制限の存在を指摘はするが、その制限の生ずる理由が多く未詳とされるため、それが見せかけの制限ではないかという不安が払拭されない。

③碁石雅利「『已然形＋や』型表現形式について――反事実設定の場合――」（『国語研究』43、昭55・3）

④村山昌俊「『なーそ』の機能――中古における修飾語介在の例について――」（同右）

⑤同「副詞『え』考――語法史における呼応弛緩の観点から――」（『国語研究』44、昭56・3）

⑥森昇一「宇津保物語の語法――係結不調の諸相について――」（『野州国文学』27、昭56・3）

碁石③は、万葉集における「已然形＋や」の形式を取り上げ、ヤが文末か文中か、文中であれば、ヤの直上の語がナレ（ニアレ）かそれ以外かという形態と、その意味との間に或る程度対応関係の存することを述べたもの。この論では、「已然形＋や」に疑問の意を認めるが、そこが実は問題で、吉永登（前出著書）は、全て反語と見るべきことを以前から主張しており、ここでもその点が深く検討されるべきであった。

村山④・⑤は、陳述副詞ナ（禁止）・エ（不可能）と述部との間に修飾語が介在した例を中心に、それぞれの語法の変質を説いたも

の。問題を取り上げる視点に面白みがある。

森⑥は、宇津保物語における係結の異例を調査したもの。興味深い問題であるが、その種の例が宇津保に多い理由について、もっと追究して欲しかったと思う。

⑦山口堯二「接続形式の分析化――判断の対象化を中心に――」(『国語と国文学』58―5、昭56・5)

は、上代から近世に至る接続形式の変遷の方向とその意味する所を考察したもの。言語史が或る意味で精神史でもあることを強く感じさせる。ただし、表題にもある「分析化」「対象化」といった筆者の用語の概念内容は、それほど分り易くない。

なお、他に彦坂佳宣「係り結びの表現特性――文法論的ちかづきから――」(『国語学研究』20、昭55・12)などがあった。

五　敬語

敬語関係の論文の数は、相変らず少なくなかった。中で、特に目についたものを挙げると、

①森昇一「源氏物語の敬語――無人格的なものへの尊敬表現――」(『野州国文学』25、昭55・3)

②高橋巖「落窪物語の敬語――男君の昇進に伴う待遇表現の変化――」(『聖和(聖和学園短期大学)』18、昭56・3)

③奥村三雄「平家物語の敬語表現―敬語・曲節・人物批判」(『文学研究(九州大学)』78、昭56・2)

④藁谷隆純「日蓮遺文の『日月星』への敬語」(『日本文学論集(大東文化大学大学院)』5、昭56・3)

などがあった。

森①は、「上も御泪の隙なく流れおはしますを」(源氏・桐壺)の如き、無人格的なものへの尊敬表現を考察したもの。高橋②は、落窪物語において、敬語を使うべき所で使われていない個所のあることについて調査したもの。奥村③は、平家物語の敬語に関して、音楽性(白声・口説・三重・中音など)・諸本・登場人物に対する評価などの関係を論じたもの。藁谷④は、日蓮遺文における、日・月・星に対する敬語を考えたもの。いずれも、問題の着眼において、新味の感じられる論である。

他にも、着実な記述的研究で注意すべきものもあるが、全て省略せざるを得ない。

おわりに

以上、繁簡一様でないが、各項目について、一わたり触れたことになる。

二年間という短かい期間では、特に傾向というべきものを指摘するのはむずかしいが、一つに現代語研究における問題意識が、次第に古代語の分野にも波及して来たことが感じられる。ただし、現代語は内省が可能であるのに対して、古代語は研究者の内省が全く及ばないという点で、根本的な違いが存する。従って、古代語研究に際しては、従来蓄積されて来た古典解釈的技術も十分生かされる必要があろう。ただし、現代語研究に発する問題意識と古典解釈的技術とがどんな形で結合すべきか、それは今後の問題である。

――聖心女子大学助教授――